家族の愛犬から、地域へ――

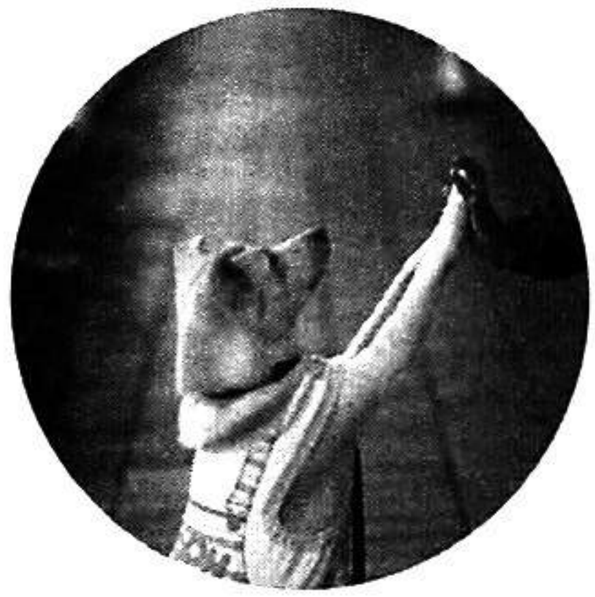
もか吉、ボランティア犬になる。

江川紹子・著

集英社インターナショナル　ウェブ立ち読み

はじめに……4
第1章　側溝で保護した、子犬がやってきた……8
第2章　病気とのたたかいと、人嫌い……20
第3章　人に寄り添う、ボランティア犬に……36
第4章　動物愛護教室「わうくらす」でのふれ合い……49

第5章 それからも、山あり谷あり……62
第6章 地域に広がる様々な活動……78
第7章 家族の愛犬から、みんなの愛犬へ……94
第8章 防犯パトロール犬隊が出発！……108
おわりに……120



はじめに

私が、初めて吉増江梨子さんと愛犬もか吉君に会ったのは、二〇一三年の秋。東京大学の弥生講堂で行われた、日本動物病院協会（ＪＡＨＡ）の大会でした。獣医、動物看護師のための専門的なプログラムのほか、全国各地で行われているアニマルセラピーに関する活動報告など、一般市民に向けた公開講座も開かれていました。

私は、前年の秋に、約二十年間共に暮らした猫を亡くした後、お世話になった動物病院が中核となり行っている、病院や高齢者施設への訪問活動に何度か同行し、アニマルセラピーの現場を見せてもらっていました。参加する動物の多くは、普通の家庭で飼われ、よくしつけられた犬たちです。特に印象的だったのは、重い病気とたたかっている子どもたちが、病棟内の廊下を犬と共に散歩する時の、うれしそうな、そしてちょっと誇らしげな顔でした。お母さん方も、その様子を盛んに写真に収めていました。実際の触れあいは、ほんのひとときであっても、そういう特別な楽しみが、日常の辛い闘病生活に、ど

れほどの励ましをもたらしているのでしょうか……。私自身が、自分の猫から与えられた和みや自信や幸せを思い返しながら、動物たちがもたらす力を感じました。

そんなこともあって、このＪＡＨＡの催しに参加してみたのです。

吉増さんも、市民公開講座での発表者の一人でした。犬の成長の過程、高齢者施設や小学校でのボランティア活動などの様子を、写真を見せながら説明し、もか吉君が「家族の愛犬」から、「みんなの愛犬」になっている様子を話しました。そして、それが吉増さんや家族にとっても、大きな喜びになっている、とのことでした。

もか吉君は、盲導犬や聴導犬のように働く犬ではありません。災害救助犬のように、特別な訓練をした犬というわけでもなさそうです。かといって、家族だけに愛されるペットとは違います。新しい動物と人との関わりが、そこから見えてくるような気がしました。

それに、それまでに私が見たボランティア犬は、プードルやテリア、トイ・プードルなどの純血種の小型犬がほとんど。雑種の中型犬で、それも野犬出身のもか吉君が、ボランティアで活躍しているのは、ちょっと驚きでした。

なにより、写真に写っているもか吉君の優しそうな目に惹かれました。

私は、発表を終えて会場を後にした吉増さんを追いかけて、外に出ました。もか吉君を

抱き上げている吉増さんの周(まわ)りには、すでに人だかりができていました。今日中に車で和歌山に帰らなければならないという吉増さんに、連絡先を聞き、後日、取材を申し込みました。もか吉君がどのように育ち、どんな活動をし、地域とどのような関わりをしているのか、もっともっと知りたくなったからです。そして、もか吉君ともゆっくり触れあってみたくなったからです。

そうして、何度か和歌山に通って、吉増さんやもか吉君を取り巻く、いろんな人たちにも会いました。そこで見たり聞いたりした話を、これからお届けします。

第1章　側溝で保護した、子犬がやってきた

始まりは、和歌山県和歌山市の郊外にある吉増さん一家にかかってきた電話でした。二〇一一年六月二十二日午前八時半頃のことです。

吉増家は、憲司さんと江梨子さん夫婦に、長女の柚花ちゃん、長男の俐空君、それに憲司さんのお母さんの美知子さんの五人暮らし。憲司さんは、二十四歳の時にお父さんが亡くなってから、大型自動車の整備や加工をする会社を引き継いで経営しています。自宅の道路を挟んだ向かいにある工場で、毎日夜遅くまで仕事をする働き者。それでも、たまに一人で魚釣りに行く以外は、休みの日には子どもたちを連れて遊びに出る、優しいお父さんです。美知子さんは、柚花ちゃんたち孫からは「アーちゃん」と呼ばれています。お料理がとても上手。とりわけ二日がかりで作る手の込んだちらし寿司は絶品です。毎日、仏壇の前でお勤めを欠かしません。柚花ちゃんは、静かに絵を描いたり本を読んだりするのが好きな、優しくて聡明な女の子。朝は、仏様にご飯をあげるお手伝いもしています。

俐空君は、逆にとても賑(にぎ)やかでお客さんが大好きです。少々やんちゃでお母さんにしばしば叱(しか)られますが、全然めげない元気者。わんぱくだけど近所の年下の子どもたちをかわいがる男の子です。

この時に電話を取ったのは、美知子さん。しばらく話し込んで受話器を置くと、江利子さんにこう言いました。

「北山さん（仮名）の家の前のどぶに、子犬が三匹いるらしいわ」

美知子さんの友人の北山さんの家の近くの山には、数匹の犬がすみ着いていました。北山さんは、この犬たちにえさをやっています。その一方で、地域の人たちと協力して、えさに眠り薬を仕込むなどして犬を保護(ほご)しようという努力もしていました。でも、眠り薬が効(き)く頃には、犬は山に戻っていて、居場所(いばしょ)がわかりません。保護するのはなかなか難(むずか)しいのです。そのうちの一匹が山の中で子どもを産んだようで、三匹の子犬連れで現れました。ところが母犬は、北山さんの所でご飯を食べた後、溝(みぞ)に子犬を置いていなくなってしまったというのです。溝は、ふだんはほとんど水がありませんが、雨が降(ふ)ると水量が増えます。

「大雨になったら、水が溢(あふ)れて、子犬たちが溺(おぼ)れてしまう」と北山さんが言っていたと聞いて、江梨子さんは心配になりました。

朝のテレビでは、台風9号が北上中で、和歌山市も明日から雨になる、という天気予報を伝えていました。子犬たちを助けるには、急いだ方がよさそうです。

「とりあえず、ちょっと見てくるわ」

夫の憲司さんにそう声をかけて、江梨子さんはすぐに準備にかかりました。子犬たちを入れる段ボール箱、軍手、バスタオル、ドッグフード、長靴などを車に積み込み、北山さんの家に向かいました。そして、家の前の溝をのぞくと……。

いました！

生まれて二カ月くらいの、白っぽい子犬が三匹。和歌山県原産の日本犬、紀州犬の血を引いている顔立ちです。ところが、江梨子さんが溝の中に降りると、二匹は勢いよく溝の中を駆け抜けて、山の方へと逃げて行ってしまいました。

一匹だけ、逃げ遅れました。逃げようとするのですが、よたよたして足に力がありません。江梨子さんが抱き上げると、その手を軽くかみました。しかし、それでもう力尽きたらしく、あとはだらりと脱力。あっさりと段ボール箱に収まりました。

体は、泥だらけ……だけならまだいいのですが、そのうえノミとダニがいっぱいでした。耳の中も後ろも、ダニで真っ黒。目の周りにもダニはびっしりついていて、まるで太いア

イラインを引いたようです。ダニは、毛の薄いところを狙ってへばりつくから、そうなるのです。

このままでは、動物病院に連れて行くのもはばかられます。江梨子さんは、いったん家に連れて帰ることにしました。

段ボール箱ごと車に乗せましたが、子犬は声を上げず、動く気配もありません。江梨子さんは子犬が死んでしまったのではないかと心配になり、途中、何度も車をとめ、箱のふたをあけて中の様子を確かめたほどです。道中、ノミが飛び跳ねて段ボール箱にぶつかるポンポンという音ばかりが、ひっきりなしにひびいていました。

家に着くと、ノミやダニの駆除薬を使いました。首の後ろの皮膚につけると、薬が体中に広がって、二十四時間でほとんどの虫を退治できます。でも、江梨子さんは「それまで待てない」と思いました。

なにしろ、体はがりがりにやせて、口の中や目の縁は血の気を失って真っ白でした。栄養状態が悪いうえ、無数のマダニに血を吸われて、すっかり貧血状態になっているように見えました。早く、病院に連れて行って、検査と治療をしないと命が危ないかもしれません。

江梨子さんは、ピンセットを使って、皮膚に食いついているマダニを一匹一匹ひねりとりました。痛みがあるはずなのに、子犬はまったく声を上げず、横たわってなされるがままでした。

道路の向かいの工場から、従業員さんが入れ替わり立ち替わり様子を見に来ましたが、子犬のあまりの汚れっぷりに近寄ろうともせず、そそくさと戻っていくのでした。江梨子さんの夫の憲司さんもやってきました。子犬を見るなり、顔をしかめて叫びました。

「どないすんの!? こんな、汚い犬！」

汚いうえに、やせっぽちで、表情もなく、子犬らしい愛らしさもありませんでした。こんな犬を連れてくるのは勘弁してくれ、というのが、憲司さんの本音でした。

その一方で、憲司さんにはあきらめに近い気持ちもありました。

（これは、あかんな。絶対、「飼う」と言うやろうな。言い出したら、何のかんの言って引かないやろうな……）

なにしろ江梨子さんは、大の動物好き。小さい頃からいつも何匹かの猫と暮らしていましたし、かつては動物病院に動物看護師として勤務していました。病院に連れてこられた、病気やけがの猫を引き取ったことも何度もあります。

結婚前、デートの約束をしていたのに、江梨子さんが突然キャンセルしたことがありました。待ち合わせの場所に向かう途中、目の前で、車が猫をはねたのを見てしまったからです。江梨子さんはすぐにけがをして血だらけになった猫を保護し、動物病院に連れて行きました。憲司さんには、「今日は行かれません」と電話をしました。猫は一命を取り留めましたが、半身不随になってしまいました。その猫を、江梨子さんは家に引き取り、一年後に亡くなるまで、面倒を見ました。

結婚してからも、江梨子さんは一時、和歌山市内の動物病院に手伝いに行っていたことがありました。そこに、九歳の大型犬チョコラブラドールが連れてこられました。体はどこも悪くない、元気な子でした。鳴き声がうるさいと近所から怒鳴り込まれ、困った飼い主が、「もう飼えない。ここで安楽死させてくれ」と言うのです。

犬も命ある生き物。いったん飼い始めたら、飼い主はその命に責任があります。時間をかけてしつけをしたり、たくさん散歩に行くなどして、できるだけ吠えないようにすることは可能ですし、どうしても飼えなくなった場合も、里親を探すなど、努力しなければなりません。しかし、切羽詰まった様子の飼い主は、「飼えない」の一点張りです。犬があまりにかわいそうで、江梨子さんは自分が引き取ることにしました。実は憲司さんは、犬

があまり好きではありません。突然、犬を連れてきたので驚きましたが、家の外で飼うということだったので、「番犬ならいいか」と折れたのでした。このチョコラブラドールも、この子犬が来る前年に、病気で亡くなるまで江梨子さんが面倒を見ました。

動物のことになると、こんなふうに一生懸命になってしまう江梨子さんの性格を、憲司さんはよくわかっていました。それで、今回の子犬も、ずっと世話を続ける、と言い出すような気がしてならなかったのです。

今回保護した子犬は、健康状態が心配でした。ようやく目のまわりについたダニを取り終わると、江梨子さんは以前手伝いに行っていた石田イヌネコ病院に連れて行きました。

診察の結果、子犬はバベシア症という病気に感染していることがわかりました。これは、マダニにかまれた時に、バベシア原虫という微生物が体に入り込み、赤血球にとりついて破壊してしまうものです。子犬や老犬の場合、死に至ることが少なくありません。この子犬も、かなり深刻な貧血になっていました。

すぐに治療が行われました。ただ、バベシアを完全に除去できる薬はなく、抗生剤などで活動を抑え込んで、体の回復を図っていくしかない、ということでした。寄生虫を駆除するための注射も打ってもらいました。かなり痛い注射なのに、子犬は声を上げること

もなく、無表情で横たわっていました。
（この子、生きていけるかなあ）
江梨子さんは確信が持てませんでした。ただ、できるだけのことはしよう、と決めて、家に連れて帰ったのです。
家に着いても、子犬はぐったりしていました。外に置くわけにはいきません。かといって、美知子さんは犬が苦手ですし、憲司さんも番犬として外で飼うならともかく、家の中に置いておくのは嫌がるでしょう。そこで、妥協案として、玄関にマットを敷いて、その上に寝かせました。
「病気やから、静かにしておいてあげてね」と江梨子さんが言うと、柚花ちゃんも、日頃は元気いっぱいの俐空君も、こっくりとうなずきました。
夜、仕事が終わって家に戻った憲司さんは、子犬の姿を見て、
（ああ、やっぱり）
と思いました。
昼間のうちに江梨子さんから、「二、三日、家の中に入れておくから」というメールがあったのですが、憲司さんはなんとなく、「二、三日」では済まないような、予感がして

なりませんでした。
美知子さんの寝室は一階に、憲司さん一家の寝室は二階にあります。最初に子どもたちが、その後大人たちも上に上がり、電灯が消されました。すると、それまでまったく声を上げず、無表情だった子犬が、キュウキュウと鳴き始めました。母犬かきょうだいを呼んでいるような声です。
それを聞いて、江梨子さんが降りていくと声は止みました。ただ、近くに寄ると、子犬は怖がって、下駄箱の下に隠れてしまいます。しばらくして、江梨子さんが寝室に戻ると、また鳴き声が聞こえてきます。江梨子さんが降りていくと、声は止みます。そんなことを数回繰り返した挙げ句、江梨子さんは階段の一番下の段に座って、子犬を見守ることにしました。わずかにうたた寝しただけで朝を迎えました。
翌日も病院へ。そして翌日の晩も同じことが繰り返されました。
治療のかいあって、子犬は一命を取り留めました。ただ、毎晩階段で夜を過ごすのでは、江梨子さんの体が持ちません。三日目から、子犬の寝場所は二階の寝室に移りました。ただ、子犬は憲司さんが近づくとぶるぶる震えて怖がります。
結局、憲司さんのベッドを子ども部屋に移し、寝室では江梨子さんと子どもたち、そし

て子犬が寝ることになりました。子どもたちが子犬に夢中になっているのを見て、子煩悩な憲司さんは、

（しゃあないな……）

と折れたのでした。

子犬は相変わらず無表情ですが、江梨子さんと一緒に寝ると安心するのか、鳴き声を上げることなく、静かに眠りました。

柚花ちゃんの発案で、子犬は「もか吉」と名付けられました。全身はほぼ白いのに、顔から耳にかけてコーヒー牛乳のような色だったからです。

憲司さんの予感は当たり、こうして子犬は家の中に居場所を獲得。「吉増もか吉」としての人生ならぬ犬生を歩み始めたのでした。

家族の愛犬から、地域へ――
もか吉、ボランティア犬になる。
江川紹子・著

発　行：集英社インターナショナル（発売 集英社）
定　価：1,400 円（本体）＋税
発売日：2015 年 12 月 15 日
ISBN：978-4-7976-7311-1 C0095

ウェブでのご予約・ご注文は こちらにどうぞ！